

【優秀賞】

【「世界をめぐる水―海水を見つめて―」】

学校法人滝学園 滝中学校 三年 小川 裕宇那

水は英語で water。決まった形のない物を示す不可算名詞。本当には形がないのか。地球にある水のうち、約97%を占める海水を、2つの塩の話から見えました。

古くから日本は海に囲まれた島国として水とつきあってきました。海というと、私は塩を思い出します。口に入れるとしょっぱい塩の味は、自然の状況下でのみ作り出せる味で、人工的には作れないそうです。日本ではそんな塩を、味噌や糠漬けなどの和食に使います。原始時代は、土器に海水を入れ、火をかけて塩味を作っていました。奈良時代からは、塩田で製塩するようになり、そして今では、製塩方法の開発がすみ、イオン交換樹脂膜法という、海水中の塩分だけを電気力で取り出して、濃い塩水をつくり、蒸留させて塩を取り出す方法”になりました。日本独自の製塩方法だそうです。日本は食塩を自給自足できています。これは、島国・日本における一つの水の恵みだと思います。

一方、世界には、降水量や河川の少ない、乾燥している地域もあり、そうした地域では長年、水不足とつきあってきました。「海水を真水に換える」日本が水不足に悩む地域に提案した物が、「海水淡水化プラント」です。高い圧力を加えて、海水の水の粒子を濾過します。水不足の解決に役立っているそうです。

日本は世界的に見て、水道技術の高い国、と教えてもらった事があります。学校の先生は、「下水処理場から、きれいにした水を川へ戻す。そういう心がけが、日本の自然環境を守る一歩になっている。」と言っていました。

日本は製塩のような、独自の水に関する高い技術をもっています。昔から水とつきあってきた日本の技術は、日本の風土にあった文化といえるように感じます。水不足に悩む地域に技術を伝えると、文化の交流が生まれます。水が状態を変えて山や川や大気を移動していく事を、「水

の循環」といいますが、技術を伝える事で生まれる文化の交流も、「水から生まれた循環」といえると思います。

私は、三本の大きな川の流れる岐阜県に住んでいます。近くを流れる川に沿って下流へ進むと、川に囲まれた輪中があります。明治時代、オランダ人のヨハネス・デレーケは、祖国・オランダの低湿地を干拓した技術を基に、輪中を大規模に工事して、水をなくしました。海津市とオランダは今でも交流をしているそうです。水によって生まれた循環は、文化の交流に似ていると思いました。

次に思い浮かべたのは、長い年月をかけて海水をとじこめた岩塩が、過去を伝えてくれるかもしれない、という話です。授業中に、岩塩にとじこめられた古代の生物を生き返らせた科学者の動画を視聴しました。生物が氷河期や隕石衝突などを経ても生きのびた理由を探る手がかりになりそうだ、と科学者の方が言っていました。水は、大昔の事を教えてくれる存在です。それだけではなく、もし、岩塩という海水のおかげで生命が生きのびてくれたのなら、海は私達を守ってくれる存在です。

水や海は、母なる水、と呼ばれます。海から生まれた生命は、水を摂取したり、水によって生きていけると言えるからです。前にみたように、水は、時間や文化交流などの様々な場面で色々な顔を見せます。水について考えると、決まった形のない水と共に、色々な世界をめぐる気分になります。そして、水の大切さ、必要性が見えました。私はもつと水について知りたいと思います。さらに水の循環が止まらないでほしいと思います。そして、今日も、誰かが使った水を、私が使います。だから私は、次に使う人を想像して、大切な水を使おうと思います。